



話のひろば

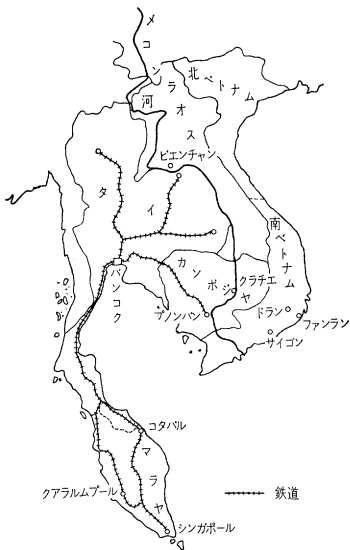
学生と東南アジアに行く

高橋 裕

■まえがき

昨年6月9日、私はカンボジアのプノンベン飛行場に降り立った。スコールの直後とはいえ、うわさに違わぬ熱気に包まれながら、出迎えの東大学生諸君と情報を交換し合った。彼らは3月29日以来、日本を離れ、タイとカンボジアをすでにまわっていたので、真黒く陽焼けした顔は現地人とさして変わらなかった。長いあご鬚の学生もいる。怪しげな現地語で、現地人と愉快そうに語り合っている学生諸君を見て一安心しながら宿舍へ向かう。フランス式に整理された都市計画、プジョー、シトロエン、ルノーなどフランスの乗用車がさすがに多い。交通標識もほとんどフランス式だ。しかし、新しく建設中の病院とか教育施設は、アメリカやソ連が競って出資

行程略図



している。近く始まるはずのテレビジョン放送は日本のエンジニアが指導している。飛行場には、はだしでみすばらしい子供たちがいっぱい走りまわっていた。伸びようとしながらも多くの悩みを抱えている後進国の今日の姿が、飛行場の周辺にも、はっきりとあら

カット写真：河とともに生活するバンコック郊外の人々

われていた。

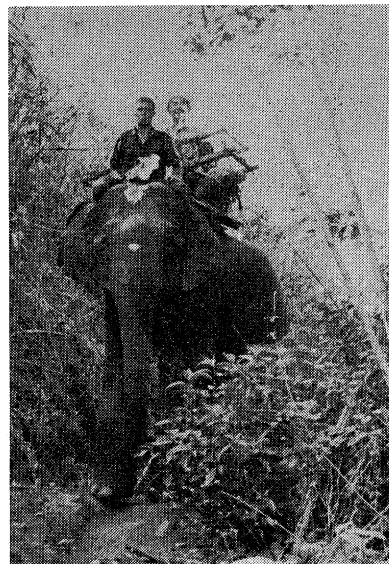
■隊の構成

東京大学アジア踏査隊は、これらアジアの国々のありのままの姿を捕え、これらの国々における開発と住民の生活との関連を探る目的で結成された。主として学生諸君の原案にもとづくこの計画では、当然現地の青年たちとの親交もまた重要な任務とされた。予算や期日の関係で、訪問国はタイ、カンボジア、ベトナム、ラオス、マラヤ、シンガポール、インドネシアにかぎることとなった。学生隊員8名のうち4名は土木工学科の神谷雅嘉、吉田洋一郎、吉谷克己、桧垣陽一の諸君、他に文学部の西原松生、上野恒資、法学部の畠山純忠、工学部の溝手洋治の諸君がいた。3月中旬から5月中旬までは文化人類学の大林太良先生が隊を指揮し、後半6月から8月にかけて、私が隊長として責任をとることとなった。

■ラワ族の調査

私がまだ日本にいた間の隊の行動でもっとも重要な成果は、大林先生によるラワ族の調査である。タイ国北西部にいまなお残るラワ族は、かつてはタイ国の先住民族であったといわれる。この亡びゆく民族の生活風習を調べることは、東南アジアの昔から今日に至る発展経過を知るうえに、きわめて重要な意義を持っている。文化人類学者の間でも、ラワ族調査の重要性は強く唱えられているにもかかわらず、本格的調査はまだほとんどなされていなかったといえる。わずかにタイのプリンス・サニット(現在フォルクスワーゲンのタイ支社長)が1937~38年、ケルン大学のフンケ教授が1958年、ミュンヘン大学のカウフマン教授が1962年に、ラワのある部落を訪れたに止まる。大林先生は学生の桧垣陽一君を助手につれ通訳をともなって4月20日から5月1日にかけて、北部タイのチェンマイからメサリアンの間に点在する三つのラワ族部落、三つのカレン族部落を訪れた。未開の土

大林先生のラワ族調査



地へ象で踏み入る困難な旅であったが、ともかく彼らの文化や生活について貴重な予備調査を行なうことができた。大林先生の話では、もし 10 年前に訪れることができたなら、より重要な業績を挙げ得たとのことだ。その意味は、最近の文化交流の激しさのゆえに、彼らの古い生活様式が急速に崩壊しつつあるからだという。このような未開部落の家の中にさえ、カレンダーの口絵に鰐淵晴子の顔を見つけて、大林先生は驚ろいたようだ。したがって、滅びゆく民族の調査は非常に急を要することになる。

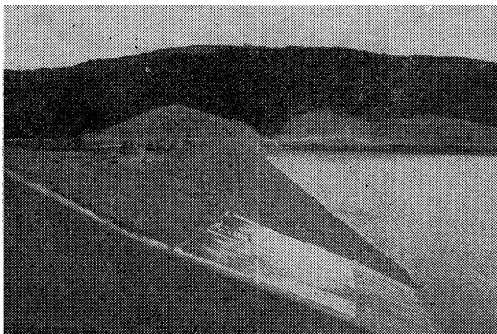
### ■ ベトナムにて

プノンペンに着いてから私は、学生諸君とともにカンボジャ、南ベトナム、ラオス、タイ、マラヤ、シンガポールの順で回った。各国の開発事業を見学し、そこに働く日本のエンジニア、現地の青年たちと話し合うのが大変勉強にもなり、日本においては知り得ぬ、また若い人々でなければ感じ取れぬ多くを学び取ることができたと思っている。ここでは、それら成果のいくつかを、旅のエピソードとともにご紹介し、特にこれから海外へ行こうとする若い土木技術者の参考に供しようと思う。

政情が不安定な国々では、われわれの行動はいちじるしく自由を欠いた。南ベトナムには 6 月 14 日から 27 日まで滞在し、その間サイゴンとダラット周辺を訪問した。ダラットはサイゴンの北約 250 km、避暑地として名高く、林芙美子が浮雲の原稿を書き上げたところである。この近くに日本の賠償工事としてダニム・ダムが工事中であった。設計は日本工営、施工は鹿島建設、間組。当時は工程の 90% まで進んでおり、昨秋には発電が開始されたはずである。標高 1000 m のダムサイトから 800 m の落差を利用して最大出力 16 万 kW、年間可能発生電力量 9 億 kWh が予定されており、堤体 350 万 m<sup>3</sup> のアースダムである。

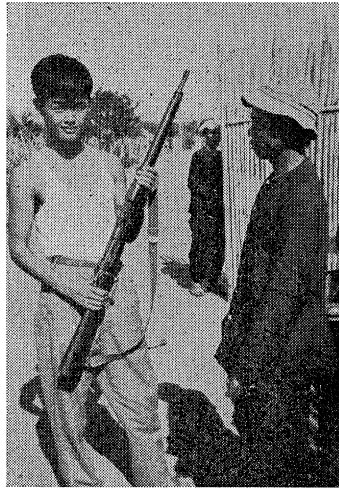
南ベトナムは山岳部を中心に各地にベトナムの勢力が浸透しているため、われわれもサイゴンーダラット間は飛行機を利用した。ダニム・ダム現場の周辺も戦略部落

ダニム・ダム (ベトナム)



となっており、すでに数回ベトナムの襲来を受けたとの

ベトナムの戦略部落にて



ことであった。ダニム・ダム見学ののち、われわれは日本工営のジープによって、近くのカムラン湾、海水浴場のニャトラン、ファンランのかんがい計画、工業立地計画地帯などを案内してもらった。この地域も山岳部はベトナムの勢力下であり、平地の道路も夜は閉ざされている。

ベトナムの評価については、話す人によって非常に違う。大使館筋や商社の多くの人々は、その力をあまり強く見ていない。つまり、アメリカ軍は空から完全に偵察していて、ベトナムの勢力分布や動向を確実につかんでいる。一般民衆の動向のみに留意して、一挙に強硬手段に出ないだけだという。しかし、ベトナムの内情を具体的に知っている人々や、現地の僧侶はじめインテリ諸氏のなかには、ベトナムがいずれは民衆の心をつかんでしまうであろうと推測している人々が決して少なくない。

われわれを案内してくれた通訳がわりの当麻さんもそのひとりだった。彼は終戦当時カンボジャにいた。沖縄出身の彼は、帰国しても肉身には会えぬと思い、ベトナムに身を投じ、7 年間フランス軍とたたかった。フランスとの停戦成るにおよんで、ベトナムの支配機構に疑問を感じて逃亡し、日本工営へ勤めるに至った。昨秋の新聞の片隅に、彼がファンランの近くでベトナムに逮捕されたとの記事を読み、われわれは心配している。

われわれのサイゴン滞り当時は、僧侶の焼身自殺の直後で、僧侶への政府の弾圧がヒステリックに行なわれていた。早稲田の大学院博士課程を出た僧侶の Doan-Van-An さんを訪ねるのも容易でなかった。政府軍がバリケードで寺を囲んでいたからだ。彼はゴジンジェム政権を強く攻撃し、焼身自殺した僧侶の心境などを静かに語ってくれた。最近彼は“ベトナムと日本の文化関係”という書を著したが、ベトナム語であるので残念ながら私には読めない。しかし、今後の日本とベトナムの相互理解を深めるうえに忘れられない貴重な人物である。もちろん彼は当時から、ゴ政権の崩壊を固く信じ、かつ期待していた。サイゴンの学生諸君やフランス帰りの若い役人たちの多くは、発言は慎重ではあったが、アメリカ

ねずみを食べているベトナムの山間民族



の態度いかんにかかわらず、ゴ政権がもはや長くないことを固く信じていた。

### ■ ラオスのビエンチャンにて

ベトナムからラオスのビエンチャンに飛んだ。ここではなにしろ長い内戦状況にあるので、行動はいっそう不自由であった。ビエンチャンの市外には出られず、うわさに違わぬ田舎町で、1週間足らずの滞在に終わった。久保田水道によるビエンチャン水道工事、新三菱重工による発電工事が進行中であった。東西両勢力の激突しているこの国では、内政もまた大変複雑であった。日本人技術者も、政府との諸交渉で、その内紛のあおりを食って苦勞することも時々あるようであった。

なによりもここでは、インフレの急進ぶりに驚ろいた。ドル換金率で公定は闇の4分の1から5分の1にまで下落しつつあった。したがってドル現金を持つ旅行者にとっては、スイスの時計、フランスの香水、各種洋酒は、香港やシンガポールよりも安値についた。もっとも品数はきわめて少なかったが……。

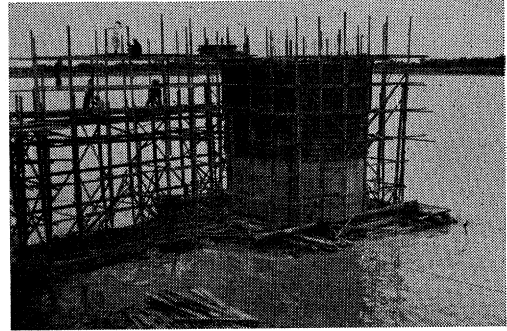
### ■ タイからシンガポールへ

ビエンチャンの市場にて



カンボジャ、ベトナム、ラオスを回ってタイのバンコクへ来ると、まったく東京へ帰ったような気持だった。その理由の第一は、なんといってもタイが東南アジア随一の文明国であるからだろう。アジアのなかでも、バンコクは東京について英語の通じない街と皮

ビエンチャンの水道工事（メコン河）



肉られるのも、日本と同じように、とまかく植民地とならなかったからかも知れない。したがって、といっは少しおかしなが街区も雑然としていて、世界各国の車がひしめき合い、道路はあちこちと掘り返されている。子供達の服装もすっかり洋式化され、テレビで憶えた日本のチャンバラを子供達がまねている。土産物屋へ行くと、買物程度なら日本語で通じる。バンコクには3000人も日本人がいるため、日本の重要新聞を空輸する会社ができていたので、一日おくれで読める。タイに滞在した期間が比較的長かったせいもあって、学生諸君もこの国には一番なじみ、友人ももっとも多くなってきたようだ。学生たちが一番よく憶えた言語もタイ語であった。のちに僧侶となった松垣君は特に早くタイ語に慣れた。松垣君だけ残して、隊は南下してマラヤを経由、シンガポールに集まった。鬼会計といわれた神谷君の緊縮財政のため、いくぶん余裕を生じたので、4人は1週間ほどインドネシアへも足を伸ばすことができた。

シンガポールは香港と同じように水不足にあえいでいた。人口の急増のみならず、高層アパート群がここ数年続々建てられていることが如実に物語るように、都市構造の近代化が水需要を急激に増してきたのであろう。それに島の大都市が持つ宿命で、その島にいかん貯水池を整備しても貯えられる水量は知れたものだ。シンガポールでもすでにマレー半島から水を引いているが、さらに大拡張計画を半島に立てつつある。この水道局長と話しているうち、一日だけ給水制限を解いて水使用量が特別に多い日を見出した。理由を尋ねると、その日はロンドンへ交渉に行っていた首相が、会議の成果をあげて帰国した日であった。香港では昨夏は4日に数時間という激しい給水制限であったが、シンガポールでも連日市内が朝の8時から夕方8時まで水道栓から水は出なかった。各ホテルなどは毎夜タンクに水をあげてそれを昼間使っていた。

東南アジアはどこへ行ってもそうであるが、とりわけシンガポールやマラヤでは中国人の存在を重視しなければならぬ。われわれも到るところで彼らと話し合い、世

話になった。つき合った中国人がほとんど戦争を知らぬ青年たちであり、かつ学生とか技術者であったせいもあり、いずれも日本の技術を評価し、日本への憧れを強く持っていた。東南アジアの精神的風土を理解するにあたって見落してならぬのが、中国人問題であり、とりわけ中国人気質への正しい理解であろう。

### ■ 河と密着する生活

メコン河—チベットからビルマ、タイ、ラオス、カンボジャ、ベトナムと 4300 km を流れ下る典型的な国際河川、種々の大規模な開発計画を持っているこの河に触れることは、われわれの大きな楽しみのひとつであった。雨期の最盛時にこの河を見られなかったのは心残りではあるが、カンボジャでのメコンの舟旅などを通して、こちらの現住民の生活が、河と共に在ることを具体的に知り得たことはまたと無い収穫であった。タイでもかんがい局の Chutima 技師の案内でチャオピヤ河をモーターボートで下り、住民の生活が全く河に依存し、道路でなく河を交通路としているその姿を知って、いまさらながらこの地域の河川開発が、日本のようにはいかないであろうことを実感として抱いたのであった。

ビエンチャンでのある朝、たまたま出張して来られた日本工営の久保田社長に、全隊員がご馳走になりつつ、メコン開発に若々しい情熱を燃やしている久保田さんのメコン構想を伺うことができたのも楽しい思い出となった。

### ■ 費用——隊員の生活状況

8人中6人の学生は3月から8月上旬まで約4カ月、西原君はあと1カ月半インドネシヤに残り 10月上旬帰国、桧垣君がバンコクで僧侶生活を3カ月送って11月上旬帰国した。教官側は大林先生と私が交代でそれぞれ2カ月滞在した。計延べ約45カ月の滞在であったが総費用は約400万円で足りた。しかもこのうち約250万円は往復と国から国へ飛んだ時の飛行機代であったから、食費、宿泊費、交通費（飛行機を除く）は大変安上

メコンの河べりの船着場（カンボジャ）



がりであった。それは、第一にこれらの国々の物価が安いこと、次に相当地に節約して旅行したこと、またベトナム、インドネシヤをはじめ、ところどころで日本の土木関係会社や在外公館の人々の好意で宿舎を世話して頂いたり、ご馳走になったりしたためである。さらにつけ加えれば、

会計係が換金その他にかなり努力して敏腕を発揮したからでもある。参考までに各国での全員の生活費を1人1日あたり米ドル換算で表示すると表のようになる。少し信用できないくらいかもしれないが、具体例を少々ご紹介しておこう。宿舎はほとんど中国人経営の二、三流の旅館に泊った。時にはベットひとつに4人くらい横に並んだり床に寝たりして、単価を切り下げることができた。食事もほとんどが中国料理で、蠅と一緒に呑み込まぬように注意しつつ、パサパサした米に汁を合わせて二、三種のおかずで多勢で食べれば、ひとりあたりは驚くほど安上がりとなるわけだ。交通費にしても、輪タクは外人と見ると数倍にふっかける傾向が強いので、適正価格以上に払った場合は当然自己負担となる。食費の場合も単独行動の場合は、1日の割当食費を越えた部分は自己負担となった。この辺が神谷君の鬼会計といわれたゆえんであろう。なにしろ食べものの恨みは何とやらというから……。

1人1日あたり平均支出額

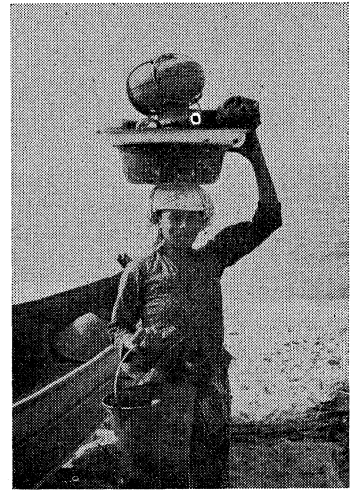
(単位米ドル)	食費	交通費	宿泊費
タイ	0.67	1.29	2.10
カンボジャ	0.89	0.39	0.14
ベトナム	0.17	0.02	0.20
ラオス	0.80	0.68	1.06
マラヤ、シンガポール	1.44	1.58	0.91
インドネシヤ	0.12	0.39	0.25

- 注 1) タイでの宿泊費が割高なのは一部ホテル代に食費がふくまれていたため  
2) ベトナム、およびインドネシヤでの各費用が少ないのは、滞在中、日本の技術者、知人などに非常に世話になったため

### ■ 桧垣君、僧となる

最後に3カ月の僧侶生活をバンコクのワット・マハタ—で送った桧垣君のことに触れておこう。旅の途中での

コタバルの海岸にて



私との何回かの話し合いの後、いくつかの条件履行を約して、7月7日、雨期に入る直前、彼はバンコクで盛大な得度式をあげ僧侶生活に入った。タイの憲法には“皇帝は仏教の信者にして宗教の擁護者たるべし”と記されている。大部分の国民が無宗教同然のわが国とは大変な相違である。皇帝たりとも僧侶の前では恭しく跪くのである。バンコクを去る前日、私は僧服の松垣君や他の学生諸君と当時エカフェの水資源開発局長をしていた安芸皎一先生のお宅に招かれた。そのときにも、タイ人の女性は松垣君の前にだけ跪くを見て、安芸さんはじめ皆うらやましがったり驚ろいたりしたものだ。

タイでは雨期の間だけは特に厳しい戒律生活に入る。安居入り（カウパンサー）から安居明け（オーパンサー）までの間に多くのタイの青年が寺にこもるのである。タイの仏教は大別してマハ派（僧約20万）とタンマユット派（僧約6000）とある。彼のいたワット・マ

松垣君の僧姿  
（マハター寺にて）



ハターは戒律のやさしい前者であった。おもな戒律は、正午以後一切の固形物は食べられないこと。飲料は茶、ココ cola、コーヒー、紅茶それにタバコなどは構わない。固形物では例外的に角砂糖とアイスクリームは許される。つぎに女性に触れてはならない。衣が女性にかすってももちろんいけない。また蚊や蚤に至るまで一切の動物を殺してはならない。

一日の生活行事は、朝夕2回の勤行（タンマン）、つまりパーリ語で書かれた経本を読むことで、これは僧になるときの試験課目でもあった。早朝の托鉢（フィンタバ）も彼は毎朝メナム河を渡し舟で渡ってトンブリへ行った。すがすがしい空気の農村風景とともに彼の忘れ得ぬ思い出のひとつだ。時間の余裕を見ては静居する。なおつけ加えておけば、タイにおける禪（ウィッパサナー）は非常にさかんで、欧米の研究者はこの国の禪に対して日本に対する以上の異常な関心を寄せている。もちろん求めに応じて、国家の儀式や、一般家庭の成人式、葬式、新築などに行ってお経をあげる。彼が外国人であるという特別な事情のゆえに、小学校などに、講演（？）にも招かれたようだ。この場合、タイでは小学校の8割近くが寺の中であり、僧侶兼教師が多いという事情をも識者に知って置いて貰いたい。寺には日曜学校があり、生徒たちが毎日集まる。寺では月に4回ワンプ

ラ（布薩の日）、月に2回パチモーク（代表僧の経読み）があって在家の人々が集まる。

私自身の気持としては、彼に僧となって数カ月とはいえ、団体生活から離れてタイに滞ることを許可した理由は、おそらく僧生活を経ることによって、より深くタイを知ることができるだろうと考えたからである。

彼がこの体験から得たものはいくつもあるが、私としては彼がすっかりタイとタイ国人を好きになって、タイへの理解が本格的になったことを最も喜びたい。タイとかカンボジャ、ビルマといった仏教国を、たとえ表面的にせよ知るために、仏教を抜きにしては考えられない。それほど彼らの生活や考え方は仏教思想と密着している。

松垣君はいまこういっている。「将来、日本の技術者がタイやカンボジャで本気で仕事をする場合、まず僧院に入って短期間でもよいから、現地の人々と全く同じ生活をするを強くすすめる。それによってこそ、現地の人々と本当に仲良くなることができる。「仲良くなる」こと、こんなにすばらしいことは無い。それはその土地で仕事をするために絶対に必要なことでもある」と……。

## ■おわりに

隊員一同が東南アジアの青年たちと話し合っただけの共通の感想は、日本人はアジア人として彼らと最も良く話し合えるということだ。彼らは素直に日本の発展に尊敬の念を持ち、特に工業技術の進歩に学びたいと考えている。特にその発展が同色人種のアジア人によってなされたという点に親しみとほげみを感じている。特にタイやベトナムの広い層のインテリは、われわれが彼らの国々を知るよりはるかに多く日本の事情を知っている。ちょうど日本人が欧米のことをよく知っているのに、向うでは日本の実情をまるで知らないのと逆の関係にある。そこで忘れてならないのは、日本もアジアの国だということだ。われわれは彼らの期待と希望に熱心に応える義務がある。一方、その義務を遂行することは、日本の発展に通ずる道であるはずだ。近隣のアジア諸国を特にその青年たちの気持を軽視してはなるまい。

そのためには、彼らの生活の実態を知ることだ。彼らの生活や農業との関係、仏教と生活慣習との関連、これらを無視しては、いかなる壮大な開発計画も必ずや画に書いた餅に終るにちがいない。

終りに、私たちの調査を国内や現地で援助して下さった多くの人々に心からお礼を申し上げつつ筆を擱く。

（正員 前 東京大学アジア踏査隊長、東京大学助教授）